

2022年7月8日

各位

公益財団法人 大同生命国際文化基金
理事長 北原 睦朗

2022年度(第37回)大同生命地域研究賞 受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：北原 睦朗）は、2022年度の「大同生命地域研究賞」の受賞者を以下のとおり決定しましたので、贈呈式を開催いたします。

1. 贈呈式

日時	2022年7月26日（火） 14:00～
場所	一般社団法人 クラブ関西 大阪市北区堂島浜1丁目3-11 電話：06（6341）5031

※贈呈式は感染防止対策を行い、少人数および短時間で開催いたします。
（贈呈式後の懇親会等の開催は控えさせていただきます。）

2. 受賞者

- (1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）
- ・ 国立民族学博物館 名誉教授 山本 紀夫 氏
- (2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）（五十音順）
- ・ 東京大学 東洋文化研究所 教授 青山 和佳 氏
 - ・ 国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授 卯田 宗平 氏
 - ・ 東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 准教授 大石 高典 氏
- (3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）
- ・ 一般社団法人アバンナット北極プロジェクト 代表理事 山崎 哲秀 氏

以上

お問合せ先：公益財団法人 大同生命国際文化基金 事務局(阪東) TEL: 06-6447-6357

大同生命地域研究賞について

1. 創設趣旨

- ・大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社（当時）の創業80周年（1982年）を記念して、外務大臣の認可を得て1985年3月に設立された公益財団法人です。設立以後、「国際的な相互理解の促進」を目的とした様々な事業を行ってまいりました。
- ・大同生命地域研究賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、「様々な地域の人々と文化に対する理解」を目的とし、関係学界の協力を得て創設されたものです。

2. 対象地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニア
（ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域に限る）

3. 賞の構成

大同生命地域研究賞は、次の3部門で構成されています。

- （1）大同生命地域研究賞
長年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名を表彰
（副賞300万円・記念品を贈呈）
- （2）大同生命地域研究奨励賞
地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名を表彰
（副賞100万円・記念品を贈呈）
- （3）大同生命地域研究特別賞
対象地域を通じて、国際親善・国際貢献を深めるうえで功労のあった方1名を表彰
（副賞100万円・記念品を贈呈）

4. 選考方法

(1) 候補者の推薦

全国の大学・研究機関等の研究者に委嘱した推薦委員が候補者を推薦します。(原則)

(2) 受賞者の決定

本財団が委嘱する選考委員で構成する会議で受賞者を決定します。

< 2022年度選考委員 (五十音順) >

早稲田大学人間科学学術院教授・東京大学名誉教授	井上 真 氏
国立民族学博物館名誉教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部教授・同大学図書館館長	臼杵 陽 氏
独立行政法人日本学術振興会監事	小長谷 有紀 氏
総合地球環境学研究所特任教授・京都大学名誉教授	松田 素二 氏

以上

2022年度
大同生命地域研究賞 受賞者

◆大同生命地域研究賞（1名）

○国立民族学博物館 名誉教授

やまもと のりお
山本 紀夫 氏

「アンデスを中心とする熱帯高地の環境人類学的研究」に対して

◆大同生命地域研究奨励賞（3名）

○東京大学 東洋文化研究所 教授

あおやま わか
青山 和佳 氏

「フィリピン、ダバオ市のサマ・バジャウ社会を対象とする、
経済と倫理の相関を通じた地域研究の人間学的発展への貢献」に対して

○国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授

うだ しゅうへい
卯田 宗平 氏

「東アジアにおける独創的な人-動物関係論の構築と展開」に対して

○東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 准教授

おおいし たかのり
大石 高典 氏

「中央アフリカ熱帯林地帯の人と自然の相互作用に関する研究を通じた
アフリカ地域研究の深化と発展への貢献」に対して

◆大同生命地域研究特別賞（1名）

○一般社団法人アバンナット北極プロジェクト 代表理事

やまさき てつひで
山崎 哲秀 氏

「北極圏における環境調査ならびに共生社会の探究」に対して

2022年度
大同生命地域研究賞

山本 紀夫 氏
国立民族学博物館 名誉教授

略 歴

山本 紀夫（やまもと のりお）

1. 現 職：国立民族学博物館 名誉教授
2. 最終学歴：京都大学農学部博士課程修了（1976年）
3. 主要職歴：1976年 国立民族学博物館 助手
1983年 国立民族学博物館 助教授
1984年 ペルーリマ市国際ポテトセンター（CIP）社会科学部客員
研究員
1992年 国立民族学博物館 教授・総合研究大学院 併任教授
2007年 国立民族学博物館 教授・総合研究大学院 併任教授 定年
退職
現在に至る

4. 主な著書・論文：

- ①『高地文明の発見』（中公新書、単著、2021）
- ②『ものがつなぐ世界史』（ミネルヴァ書房、共著、2021）
- ③『自前の思想』（京都大学学術出版会、共著、2020）
- ④『ジャガイモのきた道【韓国語版】』（AK Communications, Soul3、単著、2019）
- ⑤『熱帯高地の世界』（ナカニシヤ出版、編著、2019）
- ⑥『コロンブスの不平等交換 作物・奴隷・疫病の世界史』（角川選書、単著、2017）
- ⑦『トウガラシの世界史』（中公新書、単著、2016）
- ⑧『中央アンデス農耕文化論』（国立民族学博物館（東京大学学位申請論文）、単著、2014）
- ⑨『梅棹忠夫「知の探検家」の思想と生涯』（中公新書、単著、2012）
- ⑩『東椒世界史』（馬可羅文化【台北市】【中国語版】、2011）
- ⑪『世界の食用植物文化図鑑』（柘風舎、監訳、2010）
- ⑫『ドメスティケーション-その民族生物学的研究』（国立民族学博物館、編著、2009）
- ⑬『酒づくりの民族誌』（八坂書房、編著、2008）
- ⑭『ジャガイモのきた道』（岩波新書、単著、2008）
- ⑮『天空の帝国インカ』（PHP新書、単著、2007）
- ⑯『山の世界』（台湾商務印書館、梅棹忠夫との共編著【中国語版】、2007）
- ⑰『世界の食文化 中南米』（農文協、編著、2006）
- ⑱『雲の上で暮らす』（ナカニシヤ出版、単著、2004）
- ⑲『ジャガイモとインカ帝国』（東京大学出版会、単著、2004）
- ⑳『アンデス高地』（京都大学学術出版協会、編著、2000）
- ㉑『山の世界—自然・文化・暮らし』（岩波書店、梅棹忠夫との共編著、1992～1993）
- ㉒『ヒマラヤの環境誌』（八坂書房、稲村哲也との共編著、1992）

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：1978年 農学博士（京都大学）
2014年 学術博士（東京大学）

業績紹介

「アンデスを中心とする熱帯高地の環境人類学的研究」に対して

山本紀夫氏は、1968 年以来 50 年以上にわたって南米のアンデス地域を中心に、植物学・民族学のフィールドワークを続けている民族植物学者である。

アンデス文明の発展にはトウモロコシと共にジャガイモの栽培化が重要であったことを、フィールドで得た多様なデータに基づいて示し、アンデス研究に重要な貢献を行った。その分析手法は、植物学・民族学・文化人類学などを融合した民族植物学という新たな学際的領域であり、アンデス文明を解明する際には特に有用な手法であると高く評価された。これらの「アンデス高地の学際的地域研究」に対して 2004 年度大同生命地域研究奨励賞を受賞している。その後、山本氏はその研究を更に発展させ、「高地文明」という新たな生態史観を提唱することで、より広い視野から世界の熱帯高地で発生した文明の比較研究を展開してきた。

山本氏は、アンデス文明の成立、発展の中核となった地域が、熱帯に位置する山岳地帯であったことに着目し、従来のアンデス研究に欠けていた生態学的な視点から、アンデス文明の成立や発展に関してさらに研究を進めると共に、その対象地域を世界の高地地域（標高 2000～4000 メートル）へと広げた。熱帯高地は、これまで辺境とみなされ、ほとんど注目されなかった地域であるが、古くから大きな人口を擁して、高度な文明が成立、発展したところである。山本氏は地球レベルで山岳地域を俯瞰し、そこに熱帯高地という中心軸をもうけて高地の環境と人間との相互関係に関する比較研究を進展させた。

2011 年－2016 年には、科学研究費「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究—「高地文明」の発見に向けて」を得て、アンデスだけではなく、世界の熱帯高地の文明に関する大型の研究プロジェクトを結成した。このプロジェクトの特徴は、植物学、文化人類学、生態学、人類学、考古学、畜産学など、異なる分野の研究者を集めた文理融合型の大型研究プロジェクトであったことである。参加した 10 名の研究者は、自分の研究地域だけではなく、他の研究地域と常に比較することが求められ、地域間比較研究の視点が重視された。この分野横断的な比較研究によって、環境利用や農耕文化、独自の宗教体系、都市や帝国の形成などの「文明の編成原理」が実証的に明らかにされた。世界の四大高地としてエチオピア、メキシコ、アンデス、ヒマラヤからチベットなどが研究対象とされ、いずれも緯度の低い熱帯の高地において大きな人口が維持されてきたことを明らかにしている。さらに、その背景には動植物のドメスティケート（家畜・栽培化）がこれらの地域で行われていた点を特に重視している。

この大型研究プロジェクトの成果は、山本紀夫（編）『熱帯高地の世界：「高地文明」の発見に向けて』（ナカニシヤ出版）として2019年に出版され、さらに2021年には単著『高地文明：もう一つの「四大文明」の発見』（中公新書）が刊行されている。

「高地文明」はこれまでに広く認知された概念ではなく、山本氏の独自の生態史観に基づく精力的な研究の成果として提唱された新しい概念である。これまで「高地文明」が提唱されなかった要因は、欧米を中心とした文明史観の影響および環境と人間の関係を地球レベルで明らかにしようとする視点が欠如していたためである。今後、山本氏が提唱した「高地文明」仮説の検証が進められることによって、高地における人間と環境との関係についての理解の進展と共に、地球環境学の更なる深化にも大きく資することが期待されている。

山本氏の重要な功績の一つには、その活発な執筆活動を通じた研究成果の発信がある。2004年以降に限っても単行本を12冊出版し、高地で栄えた文明を多様な視点から紹介している。また、1978年の農学博士号（京都大学）に続き、2014年には学術博士号（文化人類学）を東京大学から授与されたことも、山本氏のたゆまぬ学究の姿勢を表している。その旺盛な研究・出版活動に対しては、松下幸之助花の万博記念奨励賞（2005年）、同記念賞（2020年）、秩父宮記念山岳賞（2006年）、今西錦司賞（2013年）などが授与されている。

以上のように、山本氏が進めてきた研究のオリジナリティの高さをはじめ、徹底した現地調査に基づく実証的研究、自然科学と人文科学を融合させた調査団の組織化による総合的地域研究の推進、一般社会への成果発信力など、その学問的功績は極めて顕著である。よって、選考委員会は一致して大同生命地域研究賞を授与することを決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2022年度
大同生命地域研究奨励賞

青山 和佳 氏

東京大学 東洋文化研究所 教授

略 歴

青山 和佳（あおやま わか）

1. 現 職：東京大学 東洋文化研究所 教授
2. 最終学歴：東京大学大学院経済学研究科博士課程修了（2002年）
3. 主要職歴：1997年 東京大学大学院経済学研究科・経済学部 助手
2004年 和洋女子大学人文学部 准教授
2007年 日本大学生物資源科学部 准教授
2009年 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
2014年 東京大学東洋文化研究所 准教授
2017年 東京大学東洋文化研究所 教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①青山和佳編『東洋文化 102号：開かれていく人文知—もう一つの世界につながるために 2』東京大学東洋文化研究所，2022年
 - ②「アンソニー・リード著，太田淳・長田紀之監修，青山和佳・今村真央・蓮田隆志訳，『世界史のなかの東南アジア—歴史を変える交差路』上下巻，名古屋大学出版会，2021年
 - ③Aoyama, Waka. *An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau*. Kyoto University Press + Tran Pacific Press, 2020
 - ④青山和佳編『東洋文化 100号：開かれていく人文知—もう一つの世界につながるために』東京大学東洋文化研究所，2020年
 - ⑤Aoyama, Waka. “To Become ‘Christian Bajau’: The Sama Dilaut’s Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines, 1997–2005.” *Filipinas Journal of the Philippine Studies Association*. (1): 109–131, 2017.
 - ⑥青山和佳・受田宏之・小林誉明編著『開発援助がつくる社会生活—現場からのプロジェクト診断』（第二版）大学教育出版，2017年
 - ⑦青山和佳「火災と教会—ダバオ市の海サマ人の生活空間の変容と持続」『アジア文化研究所研究年報』東洋大学，281–288. 2017年
 - ⑧青山和佳「交易と現地社会の再編—スルー王国における民族間階層の構築と現代を生きる海サマ人」『中国—社会と文化』31: 60–78, 2016年
 - ⑨ナイラ・カビール著，遠藤環・青山和佳・韓載香訳，『選択するカーブングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』，ハーベスト社，2016年
 - ⑩Aoyama, Waka. “Creating Living Space against Social Exclusion: The Experience of the Sama-Bajau migrants in Davao City, Philippines.” *Harvard-Yenching Institute Working Paper Series*. January 2016
 - ⑪青山和佳「未来を投企するフィリピン人—国内初の保健協同組合創設者の語りより」『東南アジア研究』50(1):39–71, 2012年

- ⑫Aoyama, Waka “Social Inequality among Sama-Bajau Migrants in Urban Settlements: A Case from Davao City” , *Hakusan Jinruigaku (Hakusan Journal of Anthropology)*, 15: 1-38, 2012
- ⑬Aoyama, Waka, “Neighbors to the “Poor” Bajau: An Oral Story of a Woman of the Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines” , *Hakusan Jinruigaku (Hakusan Journal of Anthropology)*, 13 (3-33). 2010
- ⑭青山和佳「開発援助の現場における解釈コミュニティの出現—フィリピン・ダバオ市のバジャウ集落を事例に」『アジア研究』55 (4):55-75, 2009 年
- ⑮青山和佳『貧困の民族誌—フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会, 2006 年

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : 2002 年 博士 (経済学) (東京大学)

業績紹介

「フィリピン、ダバオ市のサマ・バジャウ社会を対象とする、経済と倫理の
相関を通じた地域研究の人間学的発展への貢献」に対して

青山和佳氏は、これまで明確な方法論が確立されてこなかった地域研究に対して、独創的な思考と実践を通して、一つの可能性を提出した点で、地域研究の刷新と発展に大きな貢献をしてきた。それは、それぞれ異なる方向性を持つ開発経済学と民族誌学を人間学的に架橋するものだ。地域社会を経済を中心にマクロなシステムとして捉え、その経済的発展を志向する開発経済学の経済の論理と、ミクロな小集団や個人の集まりを起点にする民族誌学の文化の論理を、人々がともに交わりながら生の営みを集積する生活の論理で繋げていこうとする困難な試みを青山氏は見事に実践している。

青山氏が 1997 年以來、対象としてきたのは、フィリピン南西部のスールー諸島やサンボアング地域からフィリピン南部ミンダナオ島のダバオ市に移住してきたサマ・バジャウ(以下サマ)の人々である。フィリピンのスールー諸島やサンボアング地域の海民、漁民であったサマ人が、ダバオという都市的環境に移住する過程で、多くの変化を経験する。もともと「異端イスラーム」とされたり、シャーマニズムや祖霊信仰を育んできた人々は、都市社会の底辺に周縁化され差別を受けたり、真珠や貝殻の行商や物乞いなどの都市雑業を生業にしたり、キリスト教ペンテコステ派を受容したりしながら、貧困の中で自らの生活と社会を築き上げていく。青山氏は、サマ社会が経験したこの生活の持続と変容と向き合う地域研究を確立していく。

それは具体的には、経済と倫理あるいは信仰を同時に射程に入れる地域研究である。東南アジアは近年、経済的発展が著しいが、その一方で様々な領域で宗教復興も生起している。利潤と発展を追求する経済の論理と、人がいかに生きるべきか、人々といかに繋がっていくべきかを求める倫理の論理は乖離しつつある。経済発展と規範や価値観の維持、仕事と信仰が切断されていく中で、経済的に最も困窮状況(貧困)にある人々が、両者を両立させるものとして生活やウエルビーイングの論理を巧みに活用するスキルや思考を青山氏はすくい上げてきたのである。

そのための方法としては、彼らの語りと観察などの質的データを駆使する民族誌的手法と定量的データの統計的解析を用いた分析手法の接合を試みる。『貧困の民族誌：フィリピン・ダバオ市のサマの生活』においては、その手法を元にして、ダバオに移住したサマ人の多様な階層ごとに一家族を抽出し、貧困の具体的態様、キリスト教の受容、サマ・バジャウ意識の生成などを精緻に描写した。貧困の民族誌としても卓越した成果といえるだろう。

青山氏の地域研究の独創性の核心は、こうしたフィールドワークとその方法に基づいて、地域研究自体を刷新する可能性を内包する人間学的思考の提案にある。それが最も明確に表されているのが、フィールドにおける一人称の語りを多用しながら、調査地の死者や胎児などの「不在の他者」に宛てた手紙という形式で自分自身と人々の内面に迫ろうとした『An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau』である。

青山氏の人間学的視点の基本は当事者性にある。調査する研究者は、常に調査される側の人々の語りに耳を傾け理解しようとするだけではなく、そこから自分自身の存在を批判的に内省し、そこにとどまらず新たな世界（社会や制度）を創出するために動き出し、常に状況に合わせて変化をし続ける。同じように調査される人々も調査者と出会い、対話を通じて、自らの存在を変化させ続ける。そうした双方向的な当事者性が青山氏の世界研究の基礎にある。しかしながらこうした姿勢は、これまでの学問研究の土台となってきた人間観とは異質なものだ。これまでの土台を成立させてきたのは、高潔性や完全性を特徴とする西欧近代に特有な「屹立する自己」であった。このインテグリティを至高とする人間観に対して、青山氏は、不完全性、相互依存性、相互変容性（転換性）を特徴とするインティマシー型の世界観を重視するのである。それは、調査する側とされる側が「地続き」であるという認識（地続き性）と、他者（調査対象者）との関わりに責任を持って生きていこうとする被傷性を主張する世界研究の創造へと繋がっていく試みとしてある。

以上のように青山氏の研究は、開発経済学と民族誌学に人間学的志向と方法を接合した独創的で画期的な視角によって、世界研究に新たな領域を開拓してきた。青山氏が将来的にも世界研究のさらなる発展に大きく貢献する研究者として期待できることから、大同生命世界研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命世界研究賞 選考委員会）

2022年度
大同生命地域研究奨励賞

卯田 宗平 氏

国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授

略 歴

卯田 宗平（うだ しゅうへい）

1. 現 職：国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授
2. 最終学歴：総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了（2003年）
3. 主要職歴：2000年 日本学術振興会 特別研究員（DC1）
2005年 日本学術振興会 海外特別研究員（海外PD）
2008年 日本学術振興会 特別研究員（PD）
2010年 東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
特任講師
2015年 国立民族学博物館 先端人類科学研究部 准教授
2017年 国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『外来種と淡水漁撈の民俗学—琵琶湖の漁師にみる「生業の論理」』〔昭和堂、2022〕
 - ②『鵜と人間—日本と中国、北マケドニアの鵜飼をめぐる鳥類民俗学』〔東京大学出版会、2021〕
 - ③『野生性と人類の論理—ポスト・ドメスティケーションを捉える4つの思考』〔編著、東京大学出版会、2021〕
 - ④「旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼漁の技術とその存立条件—北マケドニア共和国ドイラン湖におけるマンドウラ（Mandra）漁の事例から」〔『国立民族学博物館研究報告』45(1):1-80、2020〕
 - ⑤「飼育下のウミウの成長過程と技術の収斂化—宇治川の鵜飼における計5回の繁殖作業の事例から」〔ほか3名と共著、『BIOSTORY（生き物文化誌）』33:92-101、2020〕
 - ⑥「カワウの人工繁殖をめぐる漁師の技法と生殖介入の動機—中国雲南省洱海における鵜飼漁師たちの繁殖技術の事例から」〔『国立民族学博物館研究報告』43(4):555-668、2019〕
 - ⑦「鵜飼のウミウの繁殖生態と鵜匠による技術の安定化—宇治川の鵜飼における4年間の記録から」〔ほか3名と共著、『BIOSTORY（生き物文化誌）』29:96-105、2018〕
 - ⑧「なぜ宇治川の鵜飼においてウミウは産卵したのか—ウミウの捕獲作業および飼育方法をめぐる地域間比較研究」〔『国立民族学博物館研究報告』42(2):1-87、2017〕
 - ⑨「人・動物関係におけるリバランスという視座—中国と日本の鵜飼でみられるウ類への働きかけの事例から」〔『環境社会学研究』23:20-33、2017〕
 - ⑩「宇治川の鵜飼におけるウミウの繁殖・飼育技術の特徴—中国における鵜飼の事例比較」〔ほか3名と共著、『日本民俗学』292:1-26、2017〕
 - ⑪「鵜飼漁誕生の初期条件—野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」〔『日本民俗学』286:35-65、2016〕
 - ⑫『长良川鸕鷀捕鱼再发现』〔翻訳監修、长良川鵜飼文化魅力传播事业执行委员会、2015〕
 - ⑬『鵜飼いと現代中国—人と動物、国家のエスノグラフィー』〔東京大学出版会、2014〕

- ⑭ 『アジアの環境研究入門－東京大学で学ぶ 15 講』〔編著、東京大学出版会、2014〕
- ⑮ The Behavior of Fishers after Implementation of the Project to Exterminate Nonindigenous Fish in Lake Biwa, Japan. [*Human Ecology* 38(7):237-249, 2011]

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : 2003 年 博士 (文学) (総合研究大学院大学)

業績紹介

「東アジアにおける独創的な人-動物関係論の構築と展開」に対して

卯田宗平氏は、民俗学や人類学の方法論に基づき徹底したフィールドワークによって中国大陸を軸とした東アジア圏の地域研究を精力的に展開してきた。特に東アジアにおける鵜飼文化については、先行の研究がないなかその全体像を初めて明らかにし、そこからより普遍的な人-動物関係論やドメスティケーションの生起をめぐる新たな解釈枠組みを導き出した点が高く評価できる。また、その研究過程において、民俗学・人類学的手法だけではなく、鳥類学や動物行動学の成果、リモートセンシングの技術など学際的なアプローチを積極的に採用してきたことも、地域研究の新たな展開として高く評価できよう。

卯田氏が研究対象としてきた鵜飼文化とは、漁の技術や知識、ウミウやカワウの生態や行動、淡水魚の生息環境、流通体制、魚食文化、社会体制や表象、観念を含む有形・無形の文化要素の総体である。歴史的には、諸説はあるが定着農耕が発達した新石器時代まで遡るともいわれ、現在では複雑な要素が絡み合う文化である。これに対して、卯田氏は2005年より長江中下流平原や華北平原、四川盆地、雲貴高原などをまわり、130か所以上の鵜飼を探して記録し、技術の地域的な共通性と相違性を明らかにした。こうした広域調査と並行して、中国最大の淡水湖である江西省鄱陽湖においても定点調査を続け、激動の現代中国を生きぬく鵜飼漁師たちの生きざまを民族誌『鵜飼いと現代中国—人と動物、国家のエスノグラフィー』（2014年、東京大学出版会）としてまとめた。

さらに、この成果を起点として、日本各地や東欧に位置する北マケドニア共和国の鵜飼調査も進め、漁の技術や知識、鵜の生態、鵜飼が成りたつ条件を明らかにした。そして、三か国の地域間比較を踏まえながら「動物捕獲のしにくさ」という条件が生殖介入（ドメスティケーション）を動機づけることを人類学的な枠組みのなかで明らかにした点にスケールの大きさを認めることができる。実際、この解釈枠組みは「捕まえやすいから生殖に介入する」という先行の議論を反転させた点に独自性がある。こうした一連の成果は『鵜と人間—日本と中国、北マケドニアの鵜飼をめぐる鳥類民俗学』（2021年、東京大学出版会）にまとめた。

これにとどまらず、卯田氏は一連の鵜飼研究にもとづき、動物の野生性を保持する、という動物と人間とのかかわりの論理を新たに導きだした。そのうえで、生物学や植物学、魚類学、地理学、医学を専門とする研究者による学際的な共同研究「もうひとつのドメスティケーション—家畜化と栽培化に関する人類学的研究」（国立民族学博物館、2016年-2019年）を主導し、野生性の保持という動物利用の論理がより広範な事例に適応可能であることを初めて明らかにした。この視座は、欧米の研究者らが見過ぎてき

たものであり、東アジアの鵜飼文化から大きく論理展開した点が極めて独創的である。この成果は『野生性と人類の論理—ポスト・ドメスティケーションを捉える4つの視座』（2021年、東京大学出版会）にまとめた。

以上のような調査研究だけでなく、卯田氏はアジア地域の環境問題や外来生物問題、食文化の変容など喫緊の問題群を『アジアの環境研究入門—東京大学で学ぶ15講』（編著、2014年、東京大学出版会）や『外来種と淡水漁撈の民俗学—琵琶湖の漁師にみる「生業の論理」』（2021年、昭和堂）といった教科書や学術書などにまとめる取り組みも続けている。これらの成果は、3冊の単著、3冊の編著、30編ほどの学術論文（日本語、英語、中国語）で公表されてきた。

くわえて、一連の研究成果を展示『現代中国を、カワウと生きる—鵜飼い漁師の技』（国立民族学博物館、2022年6月30日-8月2日）や『中国の鵜飼—卯田宗平フォトコレクションから』（長良川うかいミュージアム、2018年9月5日-11月5日）などの開催と通して一般に公開してきたほか、各種雑誌の記事として多く公表している。さらに、岐阜県岐阜市や関市、京都府宇治市の専門委員会委員として鵜飼技術の継承と発展計画の取りまとめに長年従事するなど実践面での豊かな経験をもっており、それが学術研究面での展開を後押ししてきたと理解できる。

以上のように、調査・理論・実証・実践の面で卓越した成果を挙げてきた卯田氏には、今後も中国、日本、東欧を対象とする地域研究の国際的牽引者となることが期待できることから、選考委員会は大同生命地域研究奨励賞の授与を決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2022年度
大同生命地域研究奨励賞

大石 高典 氏

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 准教授

略 歴

大石 高典（おおいし たかのり）

1. 現 職：東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 准教授
2. 最終学歴：京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程
研究指導認定退学（2008年）
3. 主要職歴：2008年 京都大学 こころの未来研究センター 特定研究員
2014年 総合地球環境学研究所 プロジェクト研究員
2016年 東京外国語大学 世界言語社会教育センター 特任講師
2020年 東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『焼畑が地域を豊かにする——火入れからはじめる地域づくり』, 鈴木玲治, 増田和也, 辻本侑生との共編著, 実生社, 2022年
 - ②「媒介者としてのハチ——人=ハチ関係からポリネーションの人類学へ」, 『文化人類学』, 86巻1号, pp. 76-95., 2021
 - ③「教室にフィールドが立ち上がる——アフリカ狩猟採集社会を題材にした演劇手法を用いたワークショップ」, 飯塚宜子, 園田浩司, 田中文菜との共著, 『文化人類学』, 85巻2号, pp. 325-335., 2020年
 - ④『アフリカの森の女たち——文化・進化・発達の人類学』, ポニー・ヒューレット著: 服部志帆, 戸田美佳子との共訳, 春風社, 2020年
 - ⑤『アフリカで学ぶ文化人類学——民族誌がひらく世界』, 松本尚之, 佐川徹, 石田慎一郎, 橋本茉莉との共編著, 昭和堂, 2019年
 - ⑥『犬からみた人類史』, 近藤祉秋, 池田光穂との共編著, 勉誠出版, 2019年
 - ⑦「コンゴ盆地におけるピグミーと隣人の関係史——農耕民との共存の起源と流動性」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人文明との共生』東京大学出版会, pp. 128-141., 2017年
 - ⑧ Ethnoecology and ethnomedicinal use of fish among the Bakwele of southeastern Cameroon, *Revue d'ethnoécologie*, 10号(Online), 2016年
 - ⑨ Aspects of interactions between Baka hunter-gatherers and migrant merchants in southeastern Cameroon, *Senri Ethnological Studies*, 94号, pp. 157-175., 2016年
 - ⑩『民族境界の歴史生態学—カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』, 京都大学学術出版会, 2016年
 - ⑪「ゾウの密猟はなぜなくなるか—カメルーンにおける密猟取り締まり作戦と地域住民—」阿部健一, 竹内潔, 柳澤雅之編『森をめぐるコンソナンスとディソナンス—熱帯森林帯地域社会の比較研究』CIAS Discussion Paper Series 59. 京都大学地域研究統合情報センター. pp. 15-21., 2016年
 - ⑫ A preliminary report on the distribution of freshwater fish of the Congo river: Based on the observation of local markets in Brazzaville, Republic of the Congo. 萩原幹子との共著, *African Study Monographs*, Supplementary

- Issue, 51号, pp. 93-105. 2015年
- ⑬ From ritual dance to disco: Change in habitual use of tobacco and alcohol among the Baka hunter-gatherers of southeastern Cameroon. 林耕次との共著, *African Study Monographs*, Supplementary Issue, 47号, pp. 143-163., 2014年
 - ⑭ Sharing hunger and sharing food: Staple food procurement in long-term fishing expeditions of Bakwele horticulturalists in southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue, 47号, pp. 59-72., 2014年
 - ⑮ 「【人間ゴリラ】と【ゴリラ人間】—アフリカ熱帯林における人間=動物関係と人間集団間関係の混淆—」奥野克巳, 山口未花子, 近藤祉秋編『人と動物の人類学』春風社, pp. 93-129., 2012年
 - ⑯ Cash crop cultivation and interethnic relations of the Baka Hunter-Gatherers in southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue, 43号, pp. 115-136., 2012年
 - ⑰ 「森の「バカンス」——カメルーン東南部熱帯雨林の農耕民バクウェレによる漁撈実践を事例に」木村大治, 北西功一編『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』京都大学学術出版会, pp. 97-128., 2010年

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考：2014年 京都大学博士（地域研究）

業績紹介

「中央アフリカ熱帯林地域の人と自然の相互作用に関する研究を通じた
アフリカ地域研究の深化と発展への貢献」に対して

大石高典氏は、カメルーン東南部の熱帯林地域社会を対象に、自然科学、人文学、社会科学の視点を総合させる手法を用いて、人と人、人と自然の共存メカニズムを解明してきた。専門分化が進んでいる学術界において、大石氏は地域研究の可能性をさらに広げようとしている卓越した研究者である。

大石氏は、2002年从这个地域におけるフィールドワークを続けているが、この地域では1994年以降、日本の生態人類学者が、狩猟採集民社会の組織的研究に着手し優れた成果をあげてきた。日本におけるアフリカ熱帯林のピグミー系狩猟採集民研究は、1972年以降、ザイル（現在のコンゴ民主共和国）、コンゴ共和国での調査研究を経て、現在はカメルーン東南部のバカ・ピグミー社会を対象にして精力的に展開されている。

こうした研究の蓄積の上に立って大石氏は、従来の生態人類学的研究の射程を拡大深化させ、生態的視点のみならず、複数のアクターの社会的葛藤と外世界との接触による歴史的変容を含む全体的視野に立った地域研究として、新しい領域を構築しつつある。大石氏の地域研究の画期的な意義は、以下の三点である。

第一は、方法論的な意義である。地域研究は、本来、自然科学、社会科学、人文学といった学術分野によって分断されない総合学としてある。しかしながら、地域社会を構成する多様で異質な要素とその複雑な連関を読み解く方法は確立されていない。この難点を克服するために、大石氏が採用したのが自ら「犬も歩けば棒に当たる」方式と称する方法で、知的好奇心をはりめぐらせてフィールドで遭遇するあらゆる現象、事象、出来事の深奥を知ろうとするものだ。これは、生態人類学の分野にとどまらず、総合学としての地域研究にとっても決定的に重要である。その方法論に基づいて、大石氏は、廃村跡の遺物の考古学的解析、フランス委任統治時代の行政文書の検討の他にも、漁撈研究、民族動物学、地域経済学、土地の権利問題、嗜好品文化など、フィールドで見えてきた疑問を解くために、あらゆる知識と方法を活用する。それは、フランスによる統治以前の伝統社会のダイナミズムの解明から、委任統治、独立、国民国家の樹立、資本主義経済の浸透、グローバル化の影響という今日までこの地域に外部世界から押し寄せてきた巨大な力の分析とそれに向き合ってきた地域の政治、経済、文化の変容までも同時に射程に入れて考察するもので、地域研究の可能性を見事に提示している。

大石氏の研究の第二の意義は、アフリカのピグミー系狩猟採集民研究の深化・発展に関わるものだ。これまでの研究では、狩猟採集民と周辺に居住する農耕民との関係について多くの知見が蓄積されてきた。そこには社会経済的に優位な立場にある農耕民と劣

位に置かれた狩猟採集民との関係性のあり方が主要なテーマとなってきた。そこにある大きな問題関心は「異なるものとの共生」である。社会においては、人は常に他者と関わることで存在を可能にする。しかし立場や利害、力関係の異なるもの同士は、いかに共生できるのだろうか？狩猟採集民と農耕民との関係性の研究も、この問いに応えようとしたものだった。大石氏は、これまでの農耕民-狩猟採集民関係研究が、狩猟採集民の立場（あるいは農耕民の立場）から関係を捉えてきたことを反省して、それぞれの立場に身を置いた複眼的調査研究を実施し、両者の言い分を地域のコンテクストと付き合わせて描くことに成功している。

すでに主生業としての狩猟採集活動は行なっていない狩猟採集民は、その点では農耕民と変わらないにもかかわらず、お互いを異なる存在として認識し行為するのはなぜか。また狩猟採集民社会の社会原理である平等主義と、カカオやゴムなどの商品作物栽培のもたらす市場主義とが両立するのはなぜか。こうした共存について、大石氏は、異なるもの（存在や原理）が異なることであり続けながら「ともに在る」ことを可能にする、両者を包み込む自然と社会を貫く論理を構想している。これも今後の地域研究にとって重要な提案である。

大石氏の研究の第三の意義は、研究にとどまらない地域研究の可能性を拡張した点にある。大石氏は、研究者が研究成果を一方向的に発信するのではなく、社会と連携・協働をすることで研究をさらに発展させていく超学際的スタイルを採用する。例えば、カメルーン研究者のみならず、ファシリテータや俳優との共同研究として進めている、京都の小学生にカメルーンの狩猟採集民社会の情報と知識を伝え、その一員として振舞うことで異文化理解を深める演劇的手法の実験は、その象徴的なものだろう。

以上のように大石氏の研究は、緻密で手堅いフィールドワークに基づき、学際、超学際的方法で多種多様なテーマに挑戦し、地域研究を発展させてきた。大石氏が将来的にも地域研究のさらなる発展に大きく貢献する研究者として期待できることから、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2022年度
大同生命地域研究特別賞

山崎 哲秀 氏

一般社団法人アバンナット北極プロジェクト 代表理事

略 歴

山崎 哲秀 (やまさき てつひで)

1. 現 職：一般社団法人アバンナット北極プロジェクト 代表理事
2. 最終学歴：京都私立洛南高等学校卒業（1986年）
3. 主要職歴：1986年～1997年 富山地質調査所（現（株）アースリサーチ）にて、地質掘削調査に携わる。
1999年～2004年 （株）地球工学研究所にて、氷河掘削観測調査に携わる。※これらは、北極での活動と並行する。
2004年～2006年 第46次南極地域観測隊（越冬隊）に携わる。
※隊員期間中は、国立極地研究所所属
2006年～2015年 アバンナット北極圏環境調査プロジェクト実施
※任意活動
2017年～ 一般社団法人アバンナット北極プロジェクト設立
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ① 「犬ぞり探検家が見た！ふしぎな北極のせかい」、repicbook、2018
 - ② 「エスキモー犬たちの北極大冒険 Kindle版」、UP BOOK & MAGAZINES、2014
 - ③ 「～犬ぞりがゆく～エスキモー犬たちの北極」、自費出版、2013
 - ④ Tsushima, A., Yamasaki, T. and 7 others, Ice core drilling on a high-elevation accumulation zone of Trambau Glacier in the Nepal Himalaya. *Annals of Glaciology* 62, 353-359, 2021
 - ⑤ Matoba, S., Yamasaki, T. and 8 others, Field activities at the SIGMA-A site, northwestern Greenland Ice Sheet, 2017, *Bullet. Glaciol. Res.*, 36, 15-22, 2018
 - ⑥ Hara, K., Yamasaki, T. and 2 others, Frost flowers and sea-salt aerosols over seasonal sea-ice areas in northwestern Greenland during winter-spring, *Atmos. Chem. Phys.*, 17, 8577-8598, 2017
 - ⑦ 的場澄人との共著、「極地フィールド研究者と犬ぞり北極探検家のフィールドノート」、月刊地理、60、47-51、2015
 - ⑧ Matoba, S., Yamasaki, T., and 2 others, Spatial variations of $\delta^{18}O$ and ion species in the snowpack of the northwestern Greenland ice sheet, *Bullet. Glaciol. Res.*, 32, 79-84, 2014
 - ⑨ Takeuchi, N., Yamasaki, T., and 5 others, A report on ice core drilling on the western plateau of Mt. Belukha in Russian Altai Mountains in 2003. *Polar Meteor. Glaciol.* 18, 121-133, 2004
 - ⑩ Matoba, S., Yamasaki, T., Motoyama, H., Meteorological observation and chemical compositions of precipitation during the winter and spring season in 1997/98 at Siorapaluk, northwestern Greenland, *Bull. of Glaciol. Res.*, 19, 25-31, 2002
5. 備考：—

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

業績紹介

「北極圏における環境調査ならびに共生社会の探究」に対して

山崎哲秀氏は、北極圏における探検を通して地球環境問題の解決に取り組む活動家である。

植村直己に憧れて高校卒業後から探検を始めた山崎氏は、1988年にアマゾン河イカダ下り単独行を敢行した。1989年からは北極圏、おもにグリーンランドへの遠征を繰り返し、グリーンランド北西部で現地の人びとから犬橇の操作技術や狩猟技術を学び、極地調査のスペシャリストとなった。

山崎氏は、遠征活動の過程で科学者たちと遭遇して以来、地球環境の急速な変化とりわけ温暖化や人為汚染などの課題が北極圏に顕著に現れることを目の当たりにし、極地観測という科学的な営みに積極的に関与することとなる。

例えば、1995年からは北極圏での様々な学術調査に参加した。1998年と2000年には北海道大学低温科学研究所の的場澄人氏と共同で、犬橇によるグリーンランド北部、内陸域観測調査を実施した。2003年には総合地球環境学研究所の通称オアシスプロジェクトに参加し、ロシアのペルーハ氷河からアイスコアを掘り出すドリラーとして貢献した。また2004年から2006年にかけては、第46次日本南極地域観測隊に越冬隊員として参加した。こうした学術調査の成果は多くの論文として発表されており、著者名として山崎氏の名も併記されている。

さらに、2006年からは10年間にわたる北極圏環境調査「アバンナット北極プロジェクト」を独自で計画し、実行した。

2017年には「アバンナット北極プロジェクト」を一般社団法人とし、民間支援による極地観測を継続するとともに、世界最北の先住民族の村であるグリーンランドの「シオラパルク」を廃村の危機から救うための活動にも従事している。具体的には、海氷や雪氷などの観測データを収集する一方で、現地のイヌイットの人びとから自然や生活環境の変化を聞き取り調査している。いわば、文理融合プロジェクトのワンオペである。

さらにまた山崎氏は、北極圏での経験を『犬ぞり探検家が見た！ふしぎな北極のせかい』などの絵本に著し、若い世代への啓蒙にも努めている。

世に冒険家と称される人々は少なくないが、彼らが世界各地で自身の力試しをもっぱら行うのに対して、山崎氏は地域を極地とりわけ北極圏に限った遠征によって、地球環境全体の課題に貢献するための科学的計測と、現地住民コミュニティの持続可能性のための活動を長期にわたって継続的に実施している。山崎氏の自主独立的かつ持

続的な活動に対して敬意を表しつつ、大同生命地域研究特別賞にふさわしいと高く評価したい。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

以上